巷（ちまた）のシェイクスピア

村松友視

巷（ちまた）のシェイクスピア

村松友視

実業之日本社

巷のシェイクスピア

一九九〇年九月一〇日　初版発行

著者　村松友視

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〇三（五六八一）二〇五一（編集）
TEL　〇三（五三三五）四四四一（営業）
振替東京一―三三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曽根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六（三一二）一五七三

印刷　東京研文社　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN 4－408－53132－4

©T.Muramatsu 1990
Printed in Japan

巷のシェイクスピア♣目次

巷のシェイクスピア……3
夕霧丸……73
役者……109
センチメンタル・ジャーニー……143
女ごろし……181

装幀　平野敬子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

巷（ちまた）のシェイクスピア

1

「しばらくですね……」

わざとらしい屈託なさをあらわした目で、じっとこっちを見たまま白い歯を光らせた夢野十作が、奇妙な節回しのセリフを思い出させる調子で言い、ペコリと頭を下げた。オールバックに撫でつけた頭のてっぺんが、少し薄くなったようだ。もともと年齢不詳といった風貌だから、とくに老けた感じが出ているわけではなかったが、頭髪のすきまからのぞく地肌が、かなり陽に灼けていた。

(不気味なほどの色白だったはずだが……)

戸塚一郎は、あらためて夢野の顔を見なおした。夢野の顔はやはり以前と同じように、蒼白い暗さにつつまれていた。頭のてっぺんだけが陽に灼けるというのは……戸塚は、それを考えようとしている自分に気づき、舌打ちをして思いをかき消した。

(ここから、夢野十作得意の術策におちいってしまうんだから……)

そんな戸塚の思いを察知したかのように、夢野は眉根を寄せて、真面目な顔をつくった。夢野がどんな表情をつくっても、それは芝居の役づくりの貌であって、本当の顔という感じがしな

い。それに自分でも気づいている夢野が、いろんな表情をあらわしながら、自分の本当の顔が見つからないもどかしさを感じているらしいのもおかしかった。

夢野久作をもじって十作……そんなネーミングが凄味をおびていたころもあった。かつていくつも花ひらいた小劇団のうちのひとつに、劇団「魔法瓶」というのがあった。赤と白のだんだら模様の小さなテントが、「魔法瓶」の劇場だった。マスコミに登場したいくつかの有名劇団とちがい、「魔法瓶」の芝居は新聞の劇評にも一行も書かれず、わずか五、六十人の常連客が習慣のようにやって来て、無感動な顔で帰って行く……そんなことがくり返されるだけだった。

「俺たちは、マスコミの網の目をくぐるゲリラでね……」

「魔法瓶」の役者である夢野十作が、そんなことを言って、賑やかでない客席を見回したことがあった。それは芝居上のセリフだったが、劇団「魔法瓶」の心意気の吐露でもあった。そのシーンを面白いと思った戸塚は、自分の籍をおいている新聞のコラムに、小さな記事を書いた。「魔法瓶」の記事がとにもかくにもマスコミへ登場したのは、あとにも先にもそれだけだった。

戸塚は、スポーツ新聞Fの記者だが、一面を飾る野球やゴルフよりも、文化面を好んで担当している。文化面といっても、芸能タレントのスキャンダルが主だったし、それとても大手マスコミのこぼれ種が多かった。そんな記事の中へ、自分好みの世界を紛れ込ませる……それが当時の戸塚の気分だった。

夢野十作について書いた記事も、そういういたずらの中のひとつだったが、その舞台での夢野

十作は奇妙に冴えていた。何かのきっかけで「魔法瓶」の舞台を見てから、戸塚は何ということもなく常連になっていた。「魔法瓶」の舞台はおどろおどろしく、当時の流行をただなぞっているだけという趣だった。そして、そんなレベルで満足している劇団というのはいったい何だろうという疑問のみが、戸塚が「魔法瓶」にこだわる根拠といえば根拠だった。

夢野十作という役者も、ただ大仰なセリフ回しと暗黒舞踏的なアクションに終始し、とりたてて才能を感じさせることはなかった。ところが、「俺たちは、マスコミの網の目をくぐるゲリラでね……」と言って、客席へ目を泳がせたときの夢野十作は、それまでとはまったくちがった匂いを舞台にかもし出していた。

「あのときは、何だったんだろうね……」

小さな記事をきっかけに話をするようになってから、戸塚は芝居のあとの宴会で夢野十作に声をかけた。夢野十作は、焼酎の入ったグラスを宙で止め、じっと戸塚の目をうかがうようにしてから、

「あれは、本音でね」

そう言って、一気に焼酎を飲み干した。

「本音って、どういう……」

「本音は本音ですよ。猫も杓子もマスコミに取り上げられるご時世で、そこへ登場しないゲームってのもあると思ってね」

「しかし、舞台に興味を持たれれば、マスコミは取り上げるんじゃない？」

「だけど、まるで認める人がいなけりゃ、劇団が成り立つはずがない」
「なるほどね、劇団が成り立つくらいの観客がいて、マスコミには取り上げられない……そういうゾーンがミソだってわけだ」
「そういうことですね」
「で、劇団の採算はとれてるの」
「採算？　いや、採算はとれてないでしょうね」
「それじゃ、劇団が成り立ってるっていうのは……」
「採算がとれてなくても、なぜか芝居をやる役者がいる。だから、劇団は成り立っているんですよ」
「じゃ、役者の持ち出しみたいなもんじゃない」
「その通り。芝居はすべて、役者の持ち出しですよ」
夢野十作は、座長の君島一平にちらりと目を向けてニヤリと笑い、一升瓶の焼酎をグラスに注いだ。君島は、夢野とはちがって堅実なタイプだった。この男がどうしてテント芝居などをやるのかと思うほど、芝居の匂いがしないのだ。君島は、座長ではあるが演出をするわけでなく、台本を書くこともしなかった。もちろん、舞台へ出るということもなかったから、ただ座長であるにすぎなかった。だが、役者の持ち出しだけで芝居が打てるはずもなく、おそらく君島が金を出しているのだろうと戸塚は思っていた。
戸塚は、大学一年のとき映画研究会みたいなクラブへ入ったことがあった。キノヘルボ・プロ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ダクション……それが、クラブの名前だった。キノヘルボとは、いわば草映画という意味のエスペラント語で、研究会というよりは映画づくりを目的としたクラブだった。監督がいて脚本担当がいて俳優がいる……ただそれだけで映画をつくろうというクラブだが、三年生の部長は何もしなかった。ただ、打ち合わせの場所を設定し、ロケ場所を交渉し、移動に自分の車を提供した。十六ミリの映画だったが、カメラやフィルムなどの費用は、どうやら部長が出しているらしかった。

つまり、部長は金持の息子で、スポンサー気分を満足させているにすぎなかったのだ。戸塚は、当時はやりのヌーベル・バーグに興味を抱いていたが、このキノヘルボ・プロダクションには、それとつながるセンスが何もないと感じると、半年も経たずにクラブをやめてしまった。

（君島一平にも、あの部長みたいなところがある……）

だが、君島には夢野十作に入れ上げているという感じがあった。夢野十作の夢を実現させるために金を使っている……記事をきっかけに「魔法瓶」の楽屋裏を見るようになって、戸塚はそんなふうに思い始めた。さして役者としての才能が感じられない夢野十作を、君島はなぜあんなに気にしているのだろうかと、戸塚は訝った。

「あいつはね、巷のシェイクスピアなんですよ……」

君島は、ある打上げの宴会のとき、テントの隅で奇妙なうごきをしている夢野十作を顎で示し、そんなことを戸塚に囁いた。

そのとき夢野十作は、宙に浮いている何かに目を凝らし、それを手でつかもうとしては逃げら

れる動作を、いつまでもつづけていた。それはたしかに、舞台の上で見せることのない夢野十作の姿だった。君島は、そのうごきをいとおしむごとくながめていた。
「巷のシェイクスピアって、何のことなんですか」
「舞台ではださいアングラ役者、でも、あいつがいったん巷に立つと、これはもう立派なシェイクスピア、演劇の神様みたいに見えるんですよ」
「へえ……だから巷のシェイクスピアですか」
「そういうこと」
「でも、職場で自分の才能を生かせないってことになっちゃいますか、けっきょく」
「あのね、街のケンカ屋っているでしょ」
「……」
「ケンカをやらせたら、空手の達人やボクシングのチャンピオン、あるいは相撲取りやヤクザにも勝っちゃう。だけど、正規の試合のルールでやっても駄目というタイプね。つまり、巷のルールしか合わないんですよ」
「それが夢野十作ですか」
「まあ、僕にとってはね……」
君島と戸塚がそんなことを話しているあいだ、夢野は同じうごきをくり返していた。その姿には、どこか君島の言葉をかさねられるものがただよっているような気がした。だが、それにしても舞台の夢野十作は、そういう君島の期待にこたえる様子がなく、あいもかわらずお化けの手つ

きで、ただおどろおどろしいだけの芝居を演じていた。
（いや、むしろあれが君島へのサービスかな……）
舞台の夢野を見ているうち、戸塚はそんな気がしてきた。舞台ではあくまでださい役者を演じ、巷ではシェイクスピア役者を貫徹することが、君島の期待にこたえることだと、夢野が決めているという気がしたのだ。
（もっとも、夢野十作にはそれ以外のことはできないのだが……）
舞台で凄い芝居をすることなど、夢野にはまったく無理だと、戸塚は思った。だから、わざと〝ださい役者〟を演じているというポーズをするよりほかに方法はないのだ。
だが、「俺たちは、マスコミの網の目をくぐるゲリラでね……」というセリフを吐いたときの夢野十作には、ふだんの芝居とはちがった色合いがあった。
（あれはもしかしたら、君島を演じていたのかもしれないな……）
戸塚は、あのときの夢野をそんな思いをからめて思い起すことが多かった。夢野にとっても、君島はぜったいに必要な存在にはちがいない。しかし、夢野はあくまで自分を芸術家、君島を一般人という役づけを外すことはしなかった。自分がわがままいっぱいに振舞えば、それが君島をよろこばせることになる……舞台でも巷でも、夢野はそう考えていたにちがいないのだ。
その君島が、原因不明の蒸発をしてしまうと、劇団「魔法瓶」はごく自然に消滅した。「魔法瓶」が役者の〝持ち出し〟でなく、君島の〝持ち出し〟によって成り立っていたことが、これによって証明されたと戸塚は思った。

夢野は、蒸発した君島に対する気持を隠したまま、何のおどろきも寂しさも見せず、淡々として劇団を解散した。戸塚には、夢野の心の奥底にどんな風が吹き荒んでいるのか、もちろん想像もできなかった。夢野十作は、ついに本当の〝巷のシェイクスピア〟になってしまったという思いが、戸塚の中で行ったり来たりするばかりだった。そして夢野は、戸塚の前に姿をあらわさないようになった。

その夢野十作が、戸塚の前へあらわれたのは、ちょうど一年ほど前だった。戸塚は、自分の目の前にいる夢野を見ていると、あのおどろおどろしいだけの舞台が、とてつもなく遠い日の記憶なのか、ついきのうの出来事なのかが、自分の記憶の中であいまいになっていることに気づいた。

「舞台はやってるの……」

「いや、あれっきり」

「それじゃ、巷のシェイクスピア専門ってわけだ」

「ああ、君島お得意のセリフですね」

「あんたと君島さんは、不思議な仲だったねえ」

「不思議な仲か……そう見えたでしょうね」

「君島さんは、あんたには惚れ抜いてたものなあ」

「さあ、どうですかね」

「それで、君島さんの行方はけっきょく分らないの……」

「ええ、皆目ね」
「どうして、蒸発なんかしたのかねえ」
戸塚は、思い切って喉の奥につかえていた言葉を声に出してみた。すると、夢野は遠い目になったあと、大袈裟な溜息をついて天井を見上げ、そのまま黙ってしまった。そして、急にいたずらっぽい笑顔をつくると、
「あのね……」
おもむろにポケットへ手を突っ込み、何やら小さな物をテーブルへ置いた。それは、陶器の真ん中に穴があいている、直径三センチほどの丸い形をしている物だった。
「これは、何なの」
「タバコ、ひとついただけますか……」
夢野は、変に気取ったていねいな言い方をして、戸塚の前にあったタバコのケースから、一本を抜いてくわえた。それにライターで火をつけると、一服すって宙へ目を投げ、まるで手品師のような構えで、火のついたタバコを戸塚に示した。そして、戸塚の表情を確認すると、そのタバコをテーブルへ置いた陶器の中央の穴へ突っ込み、またもや手品師の顔になった。その得意げな表情の意味が、戸塚にはつかめなかった。
「ほら……」
やがて夢野は、穴から抜き取ったタバコを戸塚に突きつけるようにした。
「だから、何なんだよ」

戸塚は、さっきからの夢野の芝居もどきに苛立っていた。
「ほら、消えてるでしょう」
「ああ、穴へ突っ込んだから酸素がなくなって消えたのか」
「これひとつですよ」
「……」
「これひとつ持ち歩けば大丈夫」
夢野は、いったん火の消えたタバコにライターの炎を近づけた。
「ああ、消えてもまたすえるってことか」
「タバコの途中でトイレへ立っても、すいかけのときに玄関へお客が来ても、これさえあれば大丈夫」
「大丈夫ねえ……」
戸塚には、夢野の考えていることが分らなかった。その陶器の穴へタバコを突っ込めば、火が消えてしまうことは理解できたが、だから大丈夫とはいったい何を意味するのだろう。
「これね、一個五百円」
「……」
「俺の知り合いに変な男がいましてね」
「……」
「その男の商売を、ま、手伝ってるというわけでして」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co